

音響ドラマ制作サークル おにぎりワゴン

## 「LAST desire ーラスト・デザイアー」第三話

### 登場キャラクター一覧

- ・ 神崎 正斗
- ・ 久留巳 勇希
- ・ 稲葉 健
- ・ 千堂 十夜
- ・ 有栖川 鳴
- ・ 高峰 歩
- ・ 響 彩子
- ・ 諏訪 京也
- ・ ナビイ||α
- ・ ナビイ||β
- ・ 諏訪 良美

※二話の部分※

正斗 「ふう……」

正斗M 「稲葉さんたちが下りてくるのには、もう少し時間がかかるだろうから、ちよつと気持ちを落ち着かせよう。ゲームとはいえ、緊張するな……」  
(心の声)

三階の位置から、健の声が聞こえる。

健 「おい！ なにぼんやりしてんだよ！ 正斗！」

正斗 「っ！ あれ、まだ三階に、どうして」

健 「へへっ、そーらよっとおお！」(三階の窓から飛び降りる)

正斗 「っ！？」

勇希 「げっ！？ 飛び降りやがったッ！」

健、三階から飛び降りて、無事着地

健 「ぐっ！ ……ふう、すげえ。衝撃はあるけど痛くもなんともねえ！」

(着地の衝撃。その後、三階から無事飛び降りれたことに感動)

正斗 「……まさか」

健 「そーいやここってゲームの中だったな〜と思って試しに飛び降りてみたけど、予想の中だったようだな、へへっ」

勇希 「おいおい、あつちも気づいちやってるぞ。大丈夫か」

正斗 「うん。まずいかも」

勇希 「まずいってお前！ どうすんだよ！」

正斗 「うーん」

正斗M 「これ、負けたかな」（心の声）

※「」まで二話の部分※

十夜は階段から普通に下りてきた。

グラウンドに到着する。

十夜 「はあ……追いついた」

健 「おっせえぞ、十夜。お前も飛び下りればよかったのによお」

十夜 「……いいから早く終わらせろ。こんなところ、これ以上いられない」

健 「ったく、相変わらずの命令口調だなあ。んじや、いっちょやってやるか」

正斗M 「はあ……とりあえず、当たってくださいだ。屋上で戦った時よりも

攻撃の威力は出せるはずだし」（心の声）

健 「ほら、また攻撃を譲ってやるから、こいよ」（煽り）

正斗 「っ……。ならお言葉に甘えてッ！ はあああ！」

（煽りに少しカチンときて、少し離れた健に向かって攻撃を仕掛ける）

正斗、健に攻撃を仕掛ける

健 「ふっ！ ぐっ！ さつきより威力上がってんじやねえか！ やるなあ！」

正斗 「やっと慣れてきたんで、ねっ！ はあ！ っ！ はああ！」

(三回連続で攻撃する)

健 「ぐっ！ っ！ おらおらあ！ もっとこいよ！」

そんなんじや、俺の絶対防御は破れねえぞ！」

正斗 「っ！ っ！ はあああああ！」(止めずに攻撃をする)

正斗M 「くっ、びくともしない！ ……こつちがダメなら」(心の声)

**正斗、素早く距離をとる。**

**そして、次は少し離れた位置にいる十夜に狙いをかえて攻撃する。**

正斗 「はああ！」(十夜に攻撃を仕掛ける)

十夜 「っ！」(正斗が向かってきたことに驚く)

健 「させねえ……よっとお！」(盾を動かし、十夜を守る)

正斗 「くっ！」(防がれる)

健 「大丈夫だったか、十夜」

十夜 「っ……あ、ああ……」(安堵)

勇希 「んあー！ おっし〜！」

正斗 「うーん……これでもだめか」

健 「おいおい、それで終わりかよ！ 張り合いねえな〜！

……んじや、次はこつちから攻めさせてもらうぜえ！」

正斗 「っ！」

**健、盾をぐわっと高い位置まで動かす**

健 「盾ってのはなあ、こういう使い方もあるんだぜ。おらああああ！」

(盾を正斗に向かって勢いよく動かす)

正斗 「ッ！」

勇希 「げっ！ 盾ぶん投げやがった！ んなのありかよ！」

正斗M 「まずい！ 避けられない！」(心の声)

### 攻撃が正斗に直撃する

正斗 「ぐあああ！」(盾が直撃し、その場に倒れ込む)

勇希 「正斗っ！」

正斗M 「くっ……さすがに衝撃で体が……！」(心の声)

健 「おら、もう一発いくぜえ！」

### 健、再び盾で正斗を狙う。

正斗M 「はあ、もうダメだ。避けられない。もう一度くらったら

しばらく立ち上がれないだろうし、……僕らの負けだ」(心の声／諦め)

健 「これで、終わりだああ！」(盾を振りおろす)

### 健、盾を振りおろす。正斗、避けようとしてない。

勇希 「正斗！」(正斗の元へかけ出す)

正斗 「っ」(勇希の声に気づく)

**勇希、正斗を庇うように盾を素手で受け止める。**

勇希 「ぐっ！」(盾を素手で受け止める／カナリの衝撃)

健 「っ！？ はあ！？ 素手で止めただと！？？」

勇希 「ぐっ……ああああ！」(盾をはねのける)

健 「っ。おいおい、素手で攻撃を止めたうえにはねのけやがった。  
なんつーバカ力だよ」

**勇希の足枷のゲージが一段階下がる**

勇希 「はあ……はあ……」

健 「ま、でもダメージはしっかり食らってるみてえだな」

正斗 「勇希さん」

勇希 「こんの、バカ野郎！ お前それでも玉ついてんのか！？ ああ！？」

正斗 「え、た、たまっ……」

勇希 「さつきよけようとしなかっただろ」

正斗 「それは……」

勇希 「勝てつつつたの忘れてんじゃねーよ、バカか」

正斗 「だからって、僕を庇うなんて……足枷のゲージ減っちゃったし」

勇希 「そんなの知るか！ 仲間がやられそうになってんのに黙って見てられっかよ！」

正斗 「……」

勇希 「リードとかガードとかどうでもいい！

守られてるだけなんてごめんなんだよ！ くそつたれ！」

正斗 「いや、でもそういうルールだし」

勇希 「ああもうごちゃごちゃうっせえな！ とにかく！  
お前は私が守る！ だからお前も、全力で私を守れ！ いいな！」

正斗 「……ふ、ふははは」

勇希 「な、なにがおかしい！ ふん、ほら、私になんか言うことあんだろ」

正斗 「……ごめん」

勇希 「ちゃーんと謝れ！」

正斗 「あ、はい。すみません」

勇希 「それでよし！」

健 「あっはは！ ったく、素手で俺の攻撃を止めるし、  
痴話喧嘩始めるし、お前らおもしれえな！ 気に入ったぜ」

勇希 「うるせえばーかばーか！」

健 「な、なんだとおてんば娘が！」

勇希 「あ！ 作戦思いついた。ごめん！ ちょっとタイム！」

健 「は？」

勇希 「ちよっと作戦会議するから、待っていてくれ」

健 「あ……ぷつ、あっははは！ なんだそりゃ！ いいぜ、待ってやるよ」

勇希 「ごによごによごによ……わかったか？」（正斗に）

正斗 「……う、うん……」

勇希 「諦めんじゃねえぞ。男見せろ。私たちは、二人でチームだ」

正斗 「わかった」

健 「お？ 終わったか？」

勇希 「おう！ んじゃ、やるぞ、正斗」

正斗 「うん。勇希さん」

勇希 「せー……のっ！」

正斗 「っ！」

正斗と勇希、同時に健に向かってかけ出す

健 「っ！ 今度は二人同時にだど！ なんのつもりだあ？」

正斗 「はああ！」（健に向かって、木刀をふりかざす）

勇希 「はああ！」（健に向かって、拳を撃ちこもうとする）

健 「二人一緒に来たって無駄だぜ、っとお！」

健、盾で二人の攻撃を防ぐとする。

勇希 「な〜んっつてな」

健 「っ！ お前！」

勇希、健への攻撃をするふりをして、十夜のほうへ向かう

健 「ちっ！ 女のほうはフェイクか！」

正斗 「どこ見てるんですか。はあ！」（健に攻撃をする）

健 「ぐっ！ くっそ！」（正斗の攻撃を防ぐ）

勇希、十夜の元へ向かう。

勇希 「よお！ イケメン君！ 思いっきり蹴りま〜っす！」

十夜 「っ！ まさか！」

勇希 「うりやあああ！」（十夜を思い切り蹴る）

十夜 「ぐあ！」（その場に倒れる）

健 「くっ、十夜ッ！」

勇希 「っしや！ 成功！ あと一発で私たちの勝ちだ！」



**十夜の足枷のゲージ、変化なし**

勇希 「つて、あれ。ゲージが減らない」

正斗 「え、嘘でしょ？」

十夜 「くっ……はあ……なるほど、ガードがガードに攻撃をしても意味がないのか」

勇希 「は、はあ！？ そんなんありかよ！ 攻撃は攻撃だろ！」

健 「ふう。ひやつとしたぜ。ドンマイだったなあお前ら！」

勇希 「正斗……ごめんねっ」（可愛く謝る）

正斗 「はあ……」

健 「つてことで、次はこっちの番だな」

**健、思い切り盾を上空にあげる。**

正斗 「っ！」

勇希 「げっ！」（盾が向かってきたことに驚く）

健 「ガラ空きだなあ！ おらあああ！」

**健の盾が、勇希に向かう。そして攻撃が当たる。**

勇希 「ぐあああッ！」（勢いよく辺り、吹っ飛ばされる）

**勇希、盾に攻撃され、吹き飛ば**

正斗 「勇希さんっ！（駆け寄る）……大丈夫！？」

勇希の足枷が一段階下がる。

勇希 「うっ……さすがにきつつ……」（起き上がる）

健 「はあ。女をいじめてるみてえで嫌な感じだなあ」

勇希 「ならもつと手加減しやがれ！」

健 「そりゃあ無理だ。こつちも勝ちてえから、なっ！」（また盾を動かす）

正斗 「っ！ ぐっ！ ぐああ！」

（盾が向かってきたことに気づき防ぐも、その衝撃に耐えられず吹き飛ばされる）

正斗、吹き飛ばされる。

正斗 「うっ！」（地面に倒れた衝撃）

健 「んじゃ、ラストいっくぜえ！」（勇希に再び攻撃）

正斗 「っ！」

正斗M 「まずい！ あと一回攻撃を受けたら！」（心の声／焦る）

正斗 「勇希さん！」

勇希 「ぐああ！」（再び攻撃される）

足枷が、パリンツと破壊される。

ブザーが鳴り響く。ナビィα、βが現れる。

α 「勝負あり〜！ イナバケン、センドウトウヤチームの勝利で〜っす！」

健 「よっしゃあ！ 勝ったあ！ 勝ったぞ十夜！」

十夜 「はぁ」(安堵)

健 「んだよ、もっと喜べって！」

正斗 「……はぁ……負けちゃった……」

勇希 「ぐっ……ッは〜！ く〜や〜じ〜！」

α 「つてことでこれにて初戦は終了だよ！」

β 「勝敗が決まったら五分で自動ログアウトするからね〜」

β 「次の対戦は決まり次第お知らせするので、なるべく毎日、

メデイカル・コアを確認してください」

α 「それじゃ！ まったねえ！」

β 「ま、また」

**αとβ、消える。**

健 「初戦にしちゃあ、まあまあな戦いだっただな」

正斗 「もう、へとへとです」

健 「ほら、立てるか？」(座り込んでいる正斗の手を差し伸べる)

正斗 「あ、ありがとうございます。っと」(健の手をとり、立ち上がる)

健 「ありがとよ。楽しかったぜ」

正斗 「いえ、こちらこそ」

健 「そういやお前ら、その制服『千鳥ヶ丘学園』のだろ。すげえ名門じゃねえか」

正斗 「いえ、そんな」

正斗M 「そういえば勇希さん、うちの制服着てる……つてことは同級生つてこと？」  
(心の声)

正斗 「稲葉さんたちは、舞子宮ですよね？」

健 「おう。十夜とは同じ学年なんだけど、まともに会話したのは今日が初めてだ」

正斗 「へえ。てつきり前から友だちなのかと思ってました」

勇希 「……って、なあにのんびり話してんだよ！」

「私たちこいつらに負けたんだぞ！ 悔しくねえのか！」

正斗 「え、まあ悔しいけど、ゲームだし」

勇希 「ゲームだろうがなんだろうが悔しいもんは悔しいんだよ！

ちつくしよー。今度はぜってえ負けねーからな！」

正斗 「いや、総当たり戦だからもう当たることはないと思うけど」

勇希 「真面目に返すな！」

健 「はっはっはっ！ お前らほんとおもしれえわ。

あ、そうだ。せっかく知り合っただし、よかつたら連絡先交換しようぜ」

正斗 「あ、ぜひ、お願いします」(少し嬉しそうに)

勇希 「う〜〜〜」(不機嫌そうに唸る)

**健と正斗、連絡先をデータ上で交換する。**

健 「交換機能があつてよかったな。なかったらどうしようかと思ったぜ」

正斗 「このあたりはちゃんとネットゲームって感じがしますね」

健 「ごほん。改めて、俺の名前は稲葉健だ。よかつたら下の名前で呼んでくれ」

正斗 「僕は、神崎正斗です。健さん、今日はありがとうございました」

健 「礼儀正しいな、お前。きっと親御さんの教育の賜物だな！」

正斗 「はは(少し苦笑い)。えっと、千堂さんも、ありがとうございました」

十夜 「……」(じっと、校舎を見つめている)

健 「おい、十夜。なに校舎見つめてんだよ」

十夜 「……。いや、なんでもない」

健 「お、そろそろログアウトの時間だ。また連絡するわ」

正斗

「はい」

勇希

「いいか！ 次会ったらボッコボコにしてやるからな！」

健

「可愛げのない女だなあ、ったく。そんじゃ！」

**ノイズの音。ログアウトが開始する。αの声が響く。**

α

「ログアウトを開始するよ。目を閉じてしばらく待っててね。

ログアウトを開始するよ。目を閉じてしばらく待っててね」

正斗

「……」（目を閉じる）

**空間が電子的な音とともに切り替わっていく。**

α

「ログアウト、完了！ また君に会えることを楽しみにしてるよ！」

**αの声が終わると同時に、フワッと電源が落ちる音がする。**

### 3・2 現実 正斗の家・リビング

正斗

「……ん……（目をゆっくり開く）……はあ……戻ってきた」

**正斗、メデイカル・コアを外し、テーブルに置く。**

**ソファから立ち、背伸びをする。**

正斗

「ん、ん〜！ はあ……。疲れたあ……。

（時計を見て） 大体、一時間半くらいやってたのか。

ふう……あとで諏訪さんに連絡しないと。さて、晩御飯晩御飯」

**正斗、リビングからキッチンに移動しようとする。**

**そこへ、インターホンが鳴る。**

正斗 「ん、誰だろ。(インターホンに出る) はい」

勇希 「はあ……はあ……はあはあ」(インターホン越し)

正斗 「……」

正斗M 「うわ……。なに、危ない人？」(心の声)

正斗 「えっと、どちら様、でしょうか？」

勇希 「はあ……私だ……久留巳、勇希、だ！」

正斗 「……。え、え！ 勇希さん！？ どうして」

勇希 「いいから入れろ！」

正斗 「わ、わかった！」

**正斗、急いで玄関に向かい、ドアを開く。**

**ドアを開くと、苦しそうに立っている勇希がいる。**

勇希 「はあ……はあ」(苦しそう)

正斗 「勇希さん、どうしてここに……って、顔真っ赤だよ！？ 大丈夫！？」

勇希 「もう……だめ……」(力尽き、正斗に倒れ込む)

正斗 「うわっ……！！(倒れてきた勇希を受け止める) ちよ、ちよっと！」

**勇希が持っていた木刀が転がる。**

正斗 「つ、木刀……これ、どうして……。勇希さん、ねえ勇希さん！ 勇希さん！」

勇希 「はぁ……はぁ……」（気を失っている）

ディスクに座り、PCでメールチェックをしている諏訪。

PCに着信が入り、出る。相手はナビィllαとβ。

諏訪 「はい。諏訪です。お疲れ様です」

α 「疲れた〜！ 京也くん肩揉んで〜」

β 「ア、アルファ、僕たち、肩なんてこらない、でしょ？」

α 「雰囲気だよ、雰囲気！ 人間の真似〜」

諏訪 「で、どうでしたか？ 初戦は」

α 「問題なく終わったよ〜！ 京也くんの弟さんも頑張ってた！」

諏訪 「そうですか。あとで褒めてあげないと」（少し嬉しそうに）

α 「あはは！ 溺愛してるんだね！」

諏訪 「本当に溺愛していたら、こんなゲームに参加させたりしませんよ」

α 「ふ〜ん。まあいいや！ ぼくたちは京也くんに従ってゲームを進行していくだけだしね」

諏訪 「今後とも、ギブアンドテイクでいきましょう」

α 「諏訪京也っていう人間は、いつ会っても変わらないね！」

β 「自分の目的のためなら、な、なんでも利用する」

諏訪 「お褒めにあずかり、光栄です」

α 「あ、そういえば、対戦で負けた時の負荷について説明し損ねちゃった！」

β 「負けた場合、ガードは、三日間寝込む……」

α 「受けたダメージが実際の体に影響が出る、なんて、皆怒っちゃうかもね！」  
 「それでも、彼らはゲームに参加しますよ、きっと。自分の欲望のためにね。」

まあ苦情がくるかもしれませんし、そのあたりは私が処理しておきます。

「ご安心ください」

α 「つと、そろそろ次の対戦が始まっちゃう！ 行ってくるね！」

諏訪 「よろしくお願いします」

α 「いってきまーす！」

β 「い、いってきます」

諏訪 「はい、いってらっしゃい」

**ウン…と電源が落ちる。**

**諏訪、椅子の背もたれに、もたれる。**

諏訪 「さて、ようやく始まった。……正斗くん、存分に頑張ってくれよ？」

### 3・4 ラスト・ディザニア内 鳴により半壊したりハビリ病院

**鳴と歩の戦い。歩がリハビリで通っている病院。だが、鳴の武器により、半壊状態。**

**鳴、逃げ回る歩と彩子をハンマーで攻撃しながら追いかける。**

鳴 「ほら！ ほら！ ほおら！ もっと早くお逃げなさいなっ！ こんなんじや、

ゲームセンターのモグラたたきよりもつまらないですわ、よお！」

歩 「もう、十分早く逃げてるよ〜！」

彩子 「もっとスピード出さないよ！ このままだと追いつかれるわよ!？」



歩 「頑張ってるけど、彩子さん重いんだもん！

抱っこして走るの結構大変なんだよ〜？」

彩子 「う、うるさいわね！ 黙って走りなさい！」

鳴 「ああ、もうおいかけっこも飽きちゃいましたわ。

パーディション・メイデン。彼女らに破滅と救済を」

**鳴のハンマーにパワーが込められる。**

歩 「わあ、なんかあのハンマー光ってるー……」

彩子 「ちよつと、あれ、とてつもなくヤバイんじゃないの？」

鳴 『『セイクリッド・アタック』！』（思い切り叩きつける）

**歩と彩子に思い切り命中する。**

歩 「きゃあああ！」

彩子 「きゃあああ！」

**歩と彩子、吹き飛ばされ、その場で倒れこむ。**

彩子 「くっ……なんなの、あの子ども……」

歩 「はあはあ……きつい〜！」

鳴 「あらあら、もう終わりですよ？」

（ゆっくり歩いて、二人に近づいていく）

彩子 「ちよつと、なんとかしなさい……！ このままだと負けちゃうのよ！？」

歩 「あ〜……だめ。体が重くて動かない〜！」

鳴 「全く、あっけないですわね。……それでは、ごきげんよう」

鳴、二人に向かって、ハンマーを思い切りぶつける。  
試合終了のブザーが鳴る。

α

「勝負あり〜！ アリスガワメイ、モリタ ミキヒサチームの勝利で〜っす！」

鳴

「ふん。もっと手ごたえのある相手に出会いたいものですわ」

### 3・5 正斗の家のリビングゲ タ方

勇希が正斗の家に訪れて、三日が経っている。

リビングゲ。テーブルに並んだ美味しそうな食事。

勇希が、正斗の作ったご飯をバクバク食べている。

正斗M

「勇希さんが突然うちに来てから三日が経った」(モノローグ)

勇希

「ばくばく食べて〜 ん〜うめ〜！」

正斗

「ゆっくり食べないと喉に詰まらせるよ」

勇希

「(口に含んだものを飲み込み) いやあ、お前料理うめえんだな。」

人はみかけによらねえってのはまさにこのことだな！

……うん、こりやもう、正斗を私の嫁にするしかない。うん、そうしよう」

正斗

「はあ……。体の具合はもう大丈夫？」

勇希

「おう！ もうバッチリだぜ！」

正斗M

「三日も寝込んでた人とは思えない元気のよさだなあ……」(心の声)

正斗 「で、これからどうするの？」

勇希 「あ？ これから？ んん、とりあえずお前戦い方がへたくそだったから鍛えるだろ、正斗の料理いっぱい食うだろ、あと」

正斗 「そうじゃなくて！ ほら、『記憶がない』ってこの前言ってたでしょ？」

勇希 「ああ！ そっちか！ んん、普通に過ごしてたら記憶も戻ってくるだろ」

正斗 「いやいや、だって自分の家もわからないんだよね？」

勇希 「おう！」

正斗 「そしたら、警察に相談しなくちゃいけないし、病院にだって行ったほうがいいって」

勇希 「絶対やだ！ そんなことしてたらゲームに参加できねーかもしれねーだろ！」

正斗 「ゲームよりも自分自身のこと考えようよ。」

勇希 さんのご家族も心配してるよきつと

勇希 「う〜〜。や〜〜だ〜〜！ やだやだや〜〜だ〜〜」(駄々こねる)

正斗 「やだ、て……そんな子どもみたいに……」

勇希 「あ！ そうか！ うん！ そうだそうだ！」(思いつく)

正斗 「やっど病院行く気になってくれた？」(少しほっとしながら)

勇希 「勝ちやあいんだ！」

正斗 「……え？」

勇希 「ほら、あのふわふわ浮いてた案内人……えーなんだっけ。ナブ？ ナギ？」

正斗 「ナビイのこと？」

勇希 「そう！ それ！ そのナビイってやつも言ってただろ？」

優勝したらなんでも願いが叶うって！

正斗 「……」(あ〜……っって感じの黙り)

勇希 「……んだよ、その呆れた顔は」

正斗 「そりや呆れたくもなるよ。」

ゲームの優勝賞品に『自分の記憶』をもらおうって考えてるんでしょ？」

勇希 「そういうこった！ これで、警察も病院も行かなくていいだろ？ な、な？」

正斗 「……はあ……」

正斗M 「だめだ、この子本気だ……本気のバカだ」(心の声)

勇希 「っしや。ってことで、今日から世話になるわ！」

正斗 「……。え？ 世話？」

勇希 「こんな広い家にひとりで住んでるんなら、一個ぐらい部屋余ってんだろ？」

**勇希立ち上がり、リビングから二階へ行こうと動く。**

正斗 「え、ちょっと待って！ ここに住むってこと！？」

勇希 「当たり前だろ」

正斗 「いや、そんなダメだって！

女の子が男と二人で住むなんてそんなのダメだと思っし、えっとえっと」

勇希 「どの部屋にしよっかな〜！」(るるるんで二階へ小走り)

正斗 「ってちよっと待ってっば！ ……はあ……ほんと、

人の話を聞かないなああの子。まるで姉さんみたいだ」

**正斗の携帯が鳴る。**

正斗 「ん、(携帯を手に取り、表示を確認する) あ、噂をすれば……。もしもし」  
(電話に出る)

良美 「まーくん！ お姉ちゃんですよ〜！」(甘えつつ、元気に)

正斗 「どうしたの。今アイルランドじゃなかったっけ？」

良美 「ちよっとまーくんが心配で日本に帰ってきちゃった。

今日そっち寄るからご飯の準備おねがい」

正斗 「はあ……ほんと唐突だなあ。何がいい？」

良美 「お鍋！ 肉団子入り！」

正斗 「もう六月だよ？ 暑くない？」

良美 「いいの。まーくんの肉団子食べたいの！」

それじゃすぐにそっち行くから！」（電話を切る）

正斗 「あ。……ほんと、いくつになっても変わらないなあ。

……ん、すぐに来る……？ つ、まずい！」

（姉の元気の良さにやれやれとしつつ、勇希がいることを思い出す）

**正斗、リビングを出て廊下へ。階段あたりで上にいるであろう勇希に声をかける**

正斗 「勇希さん！ ちょっと下りてきて！」

勇希 「あ……なんだ？」（二階から）

正斗 「いいから早く！」

勇希 「へいへい！」

正斗 M 「女の子が家にいるところを姉さんに見られたらまずい色んな意味で！

姉さんが帰ってくる前に勇希さんには一旦出かけてもらって……

ああでももう暗いから危ないし……」（心の声／焦っている）

**勇希、二階から下りてくる。**

勇希 「どうした？ 飯か？」

正斗 「さっき食べたばかりだろ？」

……ああじゃなくて！ 今から姉さんが帰ってくるんだよ、だから」

勇希 「へえ、正斗、姉ちゃんいるのか〜！ すげー会いたい！」

正斗 「いや、その、こんなところ姉さんに見られたら」

**玄関の鍵が開く音。**

正斗 「っ！」

**玄関のドアが思い切り開く。**

良美 「じゃじゃーん！ 本当にすぐ帰ってきちゃいました〜！」（元氣よく）

正斗 「……」（固まる）

勇希 「お？」

**良美、持っていた荷物を全部落とす。**

良美 「……まーくん？ 誰かな？ その子は」（笑顔だけど笑ってないような）

正斗 「あ、あはは、はは、……はぁ……」